ひかりのこ

光の子

No.73　1997. 9. 1.

● 希望に満たされて（ローマの信徒への手紙第15章13節）

残暑お見舞申し上げます

社会福祉法人　光の子どもの家

「氷　水」　　え・中島英子

「道」

恋ひをればをのづと葛の花の色
白桃に水滴ありし夜のショパン
白玉や母の世といふうすむらさき
百態の佛も残暑まぬがれず
道すこし退りて秋の仏たち
雁のこゑと思へり手を枕
新しき道へ出でけり秋の暮れ

伊藤　通明　（『白桃』主宰）

発行／社会福祉法人 光の子どもの家　　ＴＥＬ／0480－72－3883　　振替／00130－１－128022
編集／光の子 編集委員会　　〒349－11 北埼玉郡大利根町砂原277　　印刷／社会福祉法人 共愛会

神を畏れよ

コヘレトの言葉　第12章13節

すべてに耳を傾けて得た結論。
「神を畏れ、その戒めを守れ。」これこそ、人間のすべて。

理事長　福島　勲

コヘレトの言葉は空しい、空しいではじまる。まるで仏教の書にでくわしたようでもあり、またギリシャ思想のストア派（禁欲主義）の言葉かとも戸惑いさせられる。

コヘレトは前の聖書では伝道者と訳されている。これは集会の意味があり、恐らく集会を司る者、また講義するものであったろう。一節にソロモンのようにかかれているが、そうではなく、老境に入った学者、思想家であったと思われる。

「知恵を得た、しかしこれも空しい」「知恵が深まれば悩みも深まり知識が増せば痛みも増す」（一・十六・十八）と嘆く。

漱石の言葉を借りると、「知に働けば角が立つ。情に棹させば流される。意地を通せば窮屈だ。とかく人の世は住みにくい。」（草枕）で道理を弁え、世の仕組に通じた学者にとって、何をみても、聞いても人生に空しさを感じる。

空しいという字はコヘレト全巻で二十二回用いている。風を捕えるようだとの句を併せると三十九回にも及んで空しさを訴える。

空しさについて鴨長明の方丈記の「世に従えば身苦し、また従わねば狂えるに似たり」どこで何をして心を慰めようかといった句、また平家物語の有名な冒頭の句を思い浮かべる。

「祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響あり」に続いて、おごる者久しからず、平家一門の滅亡に説き及ぶ。

ある人の註によると（岩波書店・日本古典文学大系）、祇園精舎の鐘について次のように解説されている。

祇園精舎に病棟があり、四隅に鐘が吊されてあって、病僧の死が近づくと鐘が鳴り出す。そして仏典の四句の偈（諸行無常、是生滅の法なり、生滅滅し終わって、寂滅を楽となす）が説かれる。

これを聞いて病める僧らは心安らかに楽しんで死に赴くとのことである。

この鐘の響き信仰の極致といわれても、いかにも物淋しいあわれそのものである。

時にはコヘレトも世の楽しみを味わうとの衝動にかられ、王侯貴族の快楽の世界にはいるが、これまたすべて空しさを感じる。（二・一～）

何ごとも簡単に肯定する、反対に何でも否定してかかる者も、共にうけいれ難い。反対するにはそれに代わる代案が示されなければ意味がない。

コヘレトが、ことごとに強く否定しているように思われるが、これは否定のための否定ではない。

否定が結論ではなく、序論であり緒論である。

コヘレトの示す代案なる結論、それは価値の転換を来らすものだが、これに立っていないところから生ずる空しさである。

コヘレトは単なる事件の想定や作文ではなく、実際に、何もかも厭になる状況、環境にあったと思われる。

年をとって物事に感受性が薄らぎ、逆にまた昂じて、世の人の馬鹿騒ぎや若者の叫びをうとましく思うということだけではなかろう。

これが書かれた時代は恐らく、紀元前二〇〇年頃で、パレスチナが分割されたギリシャ時代の最悪の社会状勢の中だった。

だが彼には神があった。信仰の慧眼をもって、諸現象を眺めながら老いゆく自らを意識する。（十二章）

体力は弱り、歯は抜け目がかすみ、耳は遠く、気力欲望は衰える。

やがて死を迎えることだが、声を大きくして「青春の日々にこそ、お前の創造主に心を留めよ」と叫ぶ。

そして最後の節（十二・十二～）は後世の人の加筆と学者はいうが、そうであるにしても、書くべくして書き得なかったコヘレトの信仰の真髄を適確に表現している。

エッセイ

茶碗

郷土史研究家　中島　睦雄

七月末の暑い日の夕方、私はS君とM子さんと三人で雑談をしながら食事をしていた。テーブルの上には、少し大きめの湯飲み茶碗が置いてある。これは、ここの寿司屋のものではない。益子焼きの大ぶりの茶碗は、S君M子さんが私に届けてくれたものである。

益子の茶碗を、私はいくつも持っている。益子が家から近すぎず遠過ぎずの距離にあるのだから、時々出かけ、あっちこっち見て歩くうちに、つい欲しくなって買ってくる。勿論、高価なものには手が出ないのだが。

ところが、S君達が届けてくれた茶碗は、こういう形で買ったものではなく、全くの偶然による出会いがあったのである。

私が三十八年も前に担任した生徒のS君達が私の退職を祝って集まってくれた。旅行をしようというのである。そこでまず、塩原温泉でお祝いの会をして一泊である。翌日は、旅行に参加できなかったT子さんが、嫁ぎ先の真岡市で待っていて、昼食を用意しておいてくれた。その地で有名なうなぎ屋の二階へ通されて、最初にお茶が出たのだが、このお茶碗素晴らしかった。決して高級品という感じのものではないが、なぜかぴったりと来たのである。ひと目惚れである。いかにも古い益子風で、ゆったりとした形と、素朴な色彩、それに、手に取った時の感じが実に自然であった。うなぎのおいしい味は勿論だが、この茶碗は忘れることができなかった。

旅行から帰ってきてS君やM子さん達に会う機会ができた時、私はM子さんに頼んでみた。何とかしてあの茶碗を手に入れる事はできないか。ふだん使っているものをひとつ分けてもらえないか。それが無理ならば、茶碗の作者の名前だけでも聞いて欲しい。T子さんは、あのうなぎ屋と知り合いらしいから、T子さんにその事を話してみてくれないか。

ところが、数日して、M子さんから嬉しい連絡が入ったのである。

「T子さんが、うなぎ屋からあの茶碗をもらいました。T子さんが実家へ来た時、私の所へ置いていってくれた。」というのである。殆ど不可能だと思っていた望みだが、叶えられたのである。最初から望んではいけない望みだったのに。ところが、こうなってみると、私はすっかり有頂天になってしまい嬉しくてたまらなかった。早くあの茶碗を見てみたい。早くあの茶碗を使ってお茶を飲んでみたい。

「M子さん都合の良い日はいつなの？S君の方はどうだろう。」

などと、お互いの日程を調整して、やっと七月の末にあの益子の湯飲み茶碗に出会えたのであった。

M子さんは赤い風呂敷を広げて、白い紙の包みをテーブルの真中においた。そして、「開けてみてください」と私を促した。

「失礼します。」と若い女の人が寿司を運んで部屋に入ってきた。

「あ、すみません、そっちのテーブルに置いといて下さい。ここでね、今、芸術品を広げて鑑賞してますから。」

私は、少しオーバーに少しおどけてそう言った。食べるよりも茶碗との対面が先なのである。

チョリチョリと音をたてる少し堅めの紙を広げてみると、正しくあの時のあの茶碗と同じ物が現れた。何とも言えない落ち着いたダークブルーの色あいで、心もち口の部分が広がっている。枝を広げた様な太い木のイメージによる抽象的な図柄は、あのうなぎ屋で出された時と全く同じで寄せ合った三人の顔の真中に置かれた。素晴らしい器だ。私はそう思った。他の人にはどの様に映るか分からないが、私には素晴らしく映る。作者の作為や変に人目を引こうとする意識が全くなく、自然そのものである。

一瞬の静まり返った雰囲気を打ち破るように、M子さんが言った。

「みんなで、これでビールを飲もうよ。」すかさず私はそれを遮った。

「ダメ、ダメ、しばらく眺めてからにしようよ。何しろ芸術品なんだから。」三人は、この茶碗を中にして、あの時の旅行の事などを楽しく話し合っていた。

あれから何日かたった。直接手に入れてくれたT子さんには、お礼の手紙を出した。しかし、私のこの喜びと感謝の気持が、その手紙の中に充分に伝えられただろうか。うなぎ屋さんにはどうしたら良いだろうか。

そんな事を考えながら、茶碗を部屋に置いて、見続けている。

2つの文化に生きる
7

日本キリスト教団東大宮教会
バーガー　京　子

私がこの「光の子」に書かせていただき始めてから早くも一年が経とうとしている。この間、沢山の方々からご意見ご感想をいただき、次は何を書こうか、と生活の中であれやこれやと吟味しながらの毎日で私の中で、ある種の楽しみの一つになってきている。

覚えて下さる方もあるかと思うけれど、去年の今頃、「あの内気な息子が日本語の弁論大会と英語のスピーチコンテストの両方のクラス代表に選ばれて夫婦でびっくりした。」という話を書いた。その後の経過を少し書いてみたい。

日本語の弁論大会は何事もなく終わったのだが、スピーチコンテストのほうであれこれとゴタゴタがあった。六月にまず校内でスピーチコンテストが行われた。息子は、去年まで五年間ニューヨークに住んでいたという帰国子女の一人とペアーを組み、暗唱部門で学年代表賞、そして校内でのスチューデントセレクション賞と二つも賞をいただき、次は「市」で開催される大会に学校代表として出るようにと、放課後の練習が始まっていた。と、ある午後、息子が複雑な表情をして家に帰ってきた。「今日は嬉しいけれど嫌なことがあった。」ということだった。話を聞いてみると「市」のスピーチコンテストには出なくてよくなったとのことだった。理由は「お父さんがアメリカ人だかららしい。」

「嬉しい」理由はもう練習のために放課後残らなくてもよくなったからで、「嫌だな」の理由は何か差別された気分になったとのことだった。少しして英語の先生から電話がはいり、「申し訳ございません。今年から規定が変わっているのを私が見落としまして、両親及び祖父母のいずれかが外国人の場合は出場出来ないと注意書きが加わっていまして。」と言われた。私は、「息子にとって英語はもともと外国語というより母国語ですから先生は気になさらないで下さい。」と自分でも分からないのだが、とても穏やかな気分で電話を切った。これでよかったのだと思い始めた途端、次から次と色々な疑問がわいてきた。外国人て誰のことだろう。スペイン人、アメリカ人、フランス人、中国人、日本で生まれて日本で育った在日韓国人も日本では外国人なのだ。又、世界中には英語を話さない国は山ほどある。これら全部が外国人である。祖父母が外国人の場合、出場資格なし？何年に一度しか会えないような遠い外国に住んでいる祖父母がいるというだけで出場できないのか？帰国子女はどうして出場できるのだろう。息子は日本で生まれ、日本の幼稚園、小学校と行き、今、日本の中学に通っている。同じ境遇（片親が外国人）で育った子どもたちの中には英語を話さないで育ってきている子が沢山いる。息子が英語を話したり読めたりしているのは、家族、特に父親の努力があったからだ。いつも英語を語りかけ教えてきた親の努力も認めてほしい。「両親及び祖父母のいずれかが外国人の場合は出場できない。」なんていう規定が去年できたとしたら国際社会を目指している日本が逆方向に進んでいるのではないか。血筋だけで出場資格を取り消すなどあまりに軽率な規定で考えれば考える程、疑問だらけで怒りを通り越してそんな規定を作った国に住んでいることすら恥ずかしくなってきた。結局、親子でああだこうだと話し合った結果、息子が自分からこの意見を公に伝えたいと言い出し、彼の今年の日本語の弁論大会用の作文で主張することになった。題して「外国人の父親を持って」である。彼の言葉をかりてみると、「最近、クローン人間が話題になっているが、いくら同じ人間を作っても環境が違ったら同じ人間にならない。それと同じで両親や祖父母が外国人だということでその子が英語を話せるとは限らない。同じ二人のクローン人間を作りたくても血筋や遺伝だけではだめで、その環境がなければだめだ。それと同じで英語を身につけるには血筋や遺伝だけでなく環境が大切だとぼくは思う。」

結局、彼の作文は英語の先生がコピーを取られ、何かの公の機会に意見提起をして下さることになった。

学者もどきのつぶやき ㉘

留学生たち

山形大学医学部教授
仙道　富士郎

「あなたは完全主義者です」、昼食に立ち寄った中華料理店で食事の後に出たフォーチュンケーキの中のおみくじには、そう書いてあった。フォーチュンケーキとは幸運のお菓子とでも訳したらいいのだろうか、アメリカの中華料理店ではよく見かける。せんべいを割ると中からおみくじが出てくる。今の自分の状況をあまりにも適切に言い当てられており、少し驚かされると同時に少しホッとした。「そうなのだ、あまりに完全であろうとするから疲れるのだ。もっと肩の力を抜かなくては、許されないことなどそんなにないのだ」と思おうとした。

ワシントンは土曜午前十時半、今だと日本は午後十一時半、まだ起きているだろうと妻に電話をかけた。サンフランシスコにいる五男坊の電話番号を聞きたかったのだ。サンフランシスコは土曜の朝の七時半、あまり早く起こしてはかわいそうだと思い、三十分待って息子に電話をした。卒業前の追い込みで忙しいだろうと思い元気づけてやりたかった。一方で、彼の先日の電話の返事の様子から何かしら不安も感じていたのだ。「誰？」、息子は英語でとても明るいとは言えない調子の声で電話に出てきた。私であることに気づいて声の調子を変えたが、どうもおかしい。よく妻にいわれるのだが、小生は疑い深く、子どもたちには検察官のようにふるまうらしい。

しかし、検察官の勘は見事に当たり、以前に彼が申し出ていた今期の英語の講義にまじめに出席すれば試験はなく、無事に卒業できるというのは真っ赤な嘘で、何回も試験があり、その総合が七割を超えないとまた卒業が延期になること、その可能性も決して低くはないことを突き止めた。無上に腹が立った。

なぜに嘘をつくのかと激しく電話で責め立て、彼は終いには涙声になってしまった。息子は恨めしげに抗議した。「こうして最後にはガチャッと電話を切るのだ」と。

わが子ながら小生にはどうも理解できない。母親は六月の卒業式に出席するのを楽しみに旅行のプランを練っているというのに。そもそも、内定している日本の就職はどうするつもりなのか。

もう真夜中を過ぎていることを知りながら、一人では抱えきれずにまた妻に電話をしてしまった。妻は息子の気持ちもわかるという。怠け者だから言ったことをこなしきれずに嘘を重ねていくのだと。

妻の言葉の響きとしては、私が彼を追いつめて嘘をつかせるように誘導してしまっているのではとも聞こえた。

たしかに今の状況は私に完全主義者であることを強いているかもしれない。依頼原稿の締切、大学院生の論文の推敲、そして、その学術雑誌への投稿、種々の学会への出席等々、どれ一つを忘れても、あるいは期限切れになっても、私も教室も抹殺されてしまうに違いない。

否、それはあまりにも自分に都合のよい解釈だ。どんなに多忙な状況におかれていようとも、それをゆったりと受けとめ豊かに生きている人達がいるではないか。

その夜、もと大学院生として教室にいたことのある男と日本料理屋でいっぱい飲んだ。彼は笑いながら息子の気持ちもわかると言った。酒も入り、アメリカ滞在一週間の疲れも溜まっていたのか、泥のように眠りに落ちた。

火事の夢を見た。心配になってまたまた日本に電話をかけた。

息子は、小生の怒りを想うとどうしても失敗したとは言えなかったとの話、私ならまだいいが、社会に出てからそんなことでは人様に迷惑をかけることになってしまうとまたまた心配にはなる。

しかし、それにしてもあのフォーチュンケーキのおみくじは何を言わんとしていたのかいまだによく分からない。肩の力を抜けということなのだろうと勝手に解釈しておくとしよう。

プ・リ・ズ・ム

原田家日記

お盆期間に実家に担当の子ども三人を連れて帰った。

母と一緒に暮れかかった庭の芝生に莫蓙を敷き、母の暖かいもてなしのおかげか、心開いた子どもたちと楽しく食事をすることが出来た。

中三の将司は、新鮮な魚のおいしさに思わず三匹も平らげていた。いつもより食べることに集中している三人であった。ごちそうさまをしてTVの前でくつろいでいる子どもたちを背に、私は母と二人で話をした。

話をしながら私は佳美の食べ残したものをつついて食べていた。

「子どもの食べ残し平気なんだねぇ。お母さんだったら佳美ちゃんの食べ残しは食べられないもの。」と、母は感心したように言った。

「全然平気だよ。」と当たり前に言う私を見て、母が続けた。「血のつながりがなくても、愛情があれば出来ることなのかもねぇ。」

普段、愛情などという言葉を意識したことがなかったが、この時ばかりは、食べ残したものを食べるという行為によって、自らに『愛情』の存在を実感させられた。

血のつながりのない他人の子どもだけれど、ほぼ毎日のように一緒にいる。その日常が家族のようになり、愛情が生じていたのだろうと思った。

目の前にいる母親と私は血のつながりがある。それはとても深いつながりであることは確かだが、血のつながりがない生活を送っている私たちにも、それに近い関係を作り上げることが出来るという希望を持つことが出来た夏だった。　木部すなお

光の中で　佐藤家

「いいなぁ、海。」見送りに来た渓子ちゃんが、海に行く私たちの車に乗り込んできて言いました。

今夏も、たくさんの方々のご厚意で、帰省できない萌季ちゃんたちが湯河原の海へ行くことが出来、心から感謝しています。

渓子ちゃんは、祖父母宅へ帰省します。面白いか、面白くないかでことを判断してしまいがちな今、それがどんなに感謝すべきことなのかを理解するより、友だちが海に行くことが羨ましいのでしょう。帰省する思春期の子どもたちの心も複雑です。

「うつ、まずい。」と、時に海水を飲みながらも、いつもより高くて冷たい波に果敢にアタックし、萌季ちゃんたちは海を満喫しました。

湯河原の方々からの夕食のご招待もあったり、散歩、トランプ、etc・・ずっと笑顔の三日間でした。

海から帰った夕食時、自らの意志で帰省しない子どものことを「大人だねぇ」と誉めた時、萌季ちゃんが、「じゃあ、私はずっと大人だよ。」そして私に、「時々実家に帰っているくせに。」と言ってきました。

どんなに楽しい時を過ごしたとしても、帰る家のない子どもの心はどんなに大きな穴があるのか、複雑です。

「実家」を彼女たちが意識するとき、彼女たちから私は遠のけられていると感じます。引け目が私を怯ませ、伝えなければならないことが十分に出来なくなってしまう、そんなことのないようにと意識してしまいます。

心身共に安らげる、彼女たちの「実家」になれるのか、この家は、私は。

十三回目の夏が終わります。

岩崎　まり子

河のほとりで　倉沢家

分園の倉沢家に表札がついた。『倉沢』という立派な表札である。

ある日、その表札に雑巾がかぶさっていた。子どもが自転車の掃除でもしてかけ忘れていたのだろうと思って片づけておいた。数日してまたそうなっていた。そして何回もそんなことがあって、これはこの表札を隠すためのものだったのだと気がついた。

倉沢という苗字の子どもはいない。子どもたちは自分の姓と違う家に出入りすることが友人などの手前不本意なことだったのだろう、と思った。

でもどうしたらいいのか・・。表札がないと郵便屋さんや配達の人などが本当に困る、ということで付けることになったと聞いていた。

普通の家には表札というものがあること、その表札と違う姓の人が下宿をしたり、親戚の人が寄留したりする場合も少なくはないこと、全員の表札を出したらもっと変なことになること、また、『光の子どもの家分園』などという看板は論外であること、などを話し、何かもっと良い方法があるならばみんなで考えて決めよう、と提案した。

いわゆる施設ではなく、出来るだけ『普通』のたたずまいと内容の暮らしを経験させ、社会に出るに齟齬のないように心を配ってきている。

こんなことからも、施設で暮らす子どもたちの精神的、心理的な位置が、ずいぶん普通から偏っている現実を考えさせられた。倉沢　智子

子どもたちの季節　仙道家

「仙道さん家もう扇風機出そうよ」といってきたのは中一の陽志。六月も下旬で暑くはなってきた。

そこで、藤本保母が扇風機を出してくれた。もちろん、子どもたちの部屋に一台である。そう陽志にいうと、「えー、一人一台がいい。」と、マヌケなことを言う。

陽志たちの部屋は環の使っている畳のスペースと陽志の使っている段差のあるフローリングのスペースがある。一人一台ずつと主張したのはそのためだろう。だが、私は断固として、「二人で一台！相談して仲良く使うように、そうでなければ使うべからず！」と、強い態度をとった。

二人は相談して交替で使うなどルールを決めた。メデタシ・・。

ところが・・七月に入り、熱帯夜の続いた夜だった。休みで出かけていて、十一時前に帰宅した。

一階の高一の紅子が二階に向かって、「何時だと思ってるの。うるさいよ！」と言っている。

一体何？と思いながら二階に行くと、やはり陽志と環の部屋だった。

「こんな夜中に何やってんの！」と、ドアを開けると、今日は俺の番なのに！イヤ、何でお前が！と扇風機をはさんで言い合っている。

「私がこれをもって行くから。そしたら喧嘩しなくて済むでしょっ」と、私。扇風機は撤去された。

数日後、二人から、「もうケンカしないから扇風機を返してください」と言って来た。

扇風機があることでよい生活になるように説明し、約束して扇風機は彼らの部屋に戻った。メデタシ。

ところがまたも、夏休み直後のある日、「あのね、環がコードを引っかけて扇風機の羽根にひびが入って、廻したらガタガタうるさかったので、俺がひび入っているとこから折ったの、そしたらもっとうるさくなって使えなくなったの。ハハハ。」

まだまだ暑さはこれからなのに。

池田　祐子

暮らしの彩り　笹山家

四月から幼稚園年中組に入った美季ちゃん。もともと食は細い方でしたが、食事を始めてから終わるまで、楽しくきちんと食べさせるのに苦労し続けてる。その苦労が実らず前進しないように思え、日に三度悩みの時間となりつつある食事場面だ。

なぜなのだろう。食卓の話題に乗れないから？。私の関わり方の問題？。単なる性格？。体の具合？。食事がまずい？。

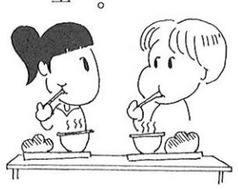
「いただきます」を言い終えるとまずお箸をもつ・・ということが難しい。食卓に醤油差しがあれば真っ先に手を伸ばし、ドレッシングがあれば自分のみにとどまらず、人のものにもかけてみる。そうかと思うとみそ汁をこぼし、大好きなサツマイモが大皿盛りにしてあると五切れも七切れも自分のものにして大きい子に叱られる。ふりかけが出てきようものなら一袋ずつ何度もじっくり見て選ぶのである。

みんなが半分以上食べ終えるころにやっと美季ちゃんの食事がスタートする。そこから先も長い。誉めてみたり叱ったり、こちらも手を変え品を変えてがんばってしまう。その時間が長引くとこちらの我慢がもたなくもなり、「もう食べなくていいから、お部屋に行って！」ということになる。「食べる～食べる～」と泣く美季ちゃん。これがいつものパターンになりつつある。美季ちゃんだって大変だ。食事が一日三度の受難の時間になってしまう。

みんなと一緒に上手に食べられたときはとても嬉しい。美季ちゃんも嬉しそう。そんな思いを存分に共有しながらやっていこう。

今日もまた美季ちゃんと私たちの前に三度の食事が横たわっている。

笹山　恵里



現場から

光の子たちと ②

藤本 曜子

四年生の詩美ちゃんは、図工が大好きです。

絵や工作なんでも得意で、学校の先生にも発想の豊かさをいつも褒められています。

さてこの夏休みにアイデア貯金箱という宿題が出ました。詩美ちゃんの得意分野なので、はりきって一番始めに取りかかりました。

紙ねんどを使って作ることにきめた詩美ちゃんと一緒に文房具屋さんに買い物に出かけました。

最近は私が小学生のころにはなかった軽いねんどがあって、普通のねんどと比べものにならないほどの軽さのものがあります。

軽い紙ねんどを買うことにして、あれこれ選んでいたら、始めに手に取ったものは少し量が少なかったので、その横にあった「軽い」という文字の入ったねんどを買って帰りました。

次の日詩美ちゃんはさっそく貯金箱の制作に取りかかりました。ところが何か様子がおかしいのです。

質感の違うねんどを前に、よくよくねんどの入っていた袋を見てみると、確かに「軽い」とは書いてあるけれども、「紙ねんど」とはどこにも書いてありません。後から詩美ちゃんは私にそのことを報告してくれたのですが、きっととっても残念だったのだろうなと思いました。

「でもね、それで貯金箱作ったよ」と詩美ちゃんは普通のねんどで作った素敵な貯金箱を見せてくれました。ブルーが基調でウサギさんやほしやチューリップなどの入ったとってもかわいらしいものです。

「素敵なのができたね」というと、「うん」といいながらも、「紙ねんどじゃないけどね」と少しさみしそうな表情を見せていました。

夏休みも後半のある日、詩美ちゃんが大きな目に涙をためて、「おネエが貯金箱こわした」と私のところに来ました。

どうやら姉妹喧嘩の時に、お姉ちゃんが貯金箱を手にとってしまったようです。

「こわした」という程の損傷ではなく、ねんどで作ったものなので握った手の跡がついてしまっていました。

でも一生懸命作った詩美ちゃんにとっては、とっても悲しい出来事でした。

「どうしようか」と相談すると「もう一度作る」と詩美ちゃん。「少しだから直せばきれいに直せそうな気もするけどね」と私。「でも直してもまたこわされちゃうよ」と詩美ちゃん。「詩美ちゃんは一番どうしたいの?」とたずねると、「直す」といって部屋に行って作業をし始めました。

私はねんどを買い間違えた時から、詩美ちゃんが紙ねんどで作り直したいと思っていることは分かっていました。今だって本当なら、「紙ねんどで作り直したい」ということが詩美ちゃんの本心に決まっています。

でも彼女は言い出すことができないのです。わがままだと感じているのか、我慢をしているのがよく分かります。自分から言い出せたらいいなと思って少し待ってみましたがやっぱり言い出せません。

少したってからお部屋に行って「詩美ちゃんこれでいいの?」とたずねて、「本当は紙ねんどで作りたいんじゃないの?」ときくと、少し涙目で「うん」とこたえます。

言えなかった理由は、ねんどを買うとまたお金がかかってしまうということでした。

言いたいことも言わせてあげられないことを申し訳なく思いながら、そういう時は自分で諦めてしまうのではなくて相談してくれたらうれしいという話をしました。

そして、その日のうちに私は紙ねんどを買いに行きました。

詩美ちゃんはというと、その間に最初に作った貯金箱も直していたようです。

今詩美ちゃんは新たな貯金箱『ペンギンちゃん』に取り組んでいます。

そして、はじめに買った方のねんどの余ったものを、小さい子たちに快く貸してあげて、みんなで楽しくねんど遊びをしているところです。

養護メモ 68

人になる Ⅱ

菅原 哲男

母との共生期を出生と同時に失った者に、自己の人格の中に他者を生成する手だては失われていたのだ。と前号で書いた。

このことは、ここで同じ学齢の子どもたちが数名同じ条件で育てられていて、その思春期の揺れ方がそれぞれに著しく違っていることから確認させられる。昔話になったかのようなかつてのホスピタリズム論争をほうふつとさせるような事例にしばしば出くわすのである。

思春期はヒトが人になるための基本的な基準を身につける機会である。全的な依頼をしていた親やそれに代わる者たちや環境から、自らの足で立ちあがりこの社会の大海に旅立っていくための身構えがはじまる。

寄りかかっていたものから自立する・・不安と自尊が入り交じり不確かにふらふらと立ち上がるのである。不安であることは自明のことだ。

思春期は揺れに揺れる大海の小舟のようなものなのだ。それでもその振幅は大抵こんなものだろうくらいの見当はつくものである。この子は何回か家出するだろう、あの子は万引きするだろう、彼は高校一二年の間に自宅謹慎程度は経験するだろうなどと。このような予測の範囲にいるのは多くは新生児の時から親と暮らした経験が二年以上あるグループなのである。そしてこれらの子どもたちは、自分の失敗をどう謝ろうか、償おうか許してもらうにはどうすればいいのかなど問題の解決を考えようとすることができる。

しかし、そんな予測をはるかに超えてしまう一群がこれまで書いてきた庄一たち母との関係を経験しないかあっても極端に少ない子どもたちなのである。些細な理由で職員に暴行をはたらく。この三〇年を超える養護施設の暮らしのなかで暴力を加えられそうになったのはこのグループのなかの二名だけなのである。

思春期問題は乳幼児期の母子関係の問題でもある。

乳幼児期に親・・取り分け母との間にうまく愛着行動を基本にしたよい関係が持てた子どもたちは、その母を自分の確実な基地のように認識し、そこから回りを探検するように行動し、不安になれば母のところに戻って母に触り、元気を取り戻した探検に出ていくといわれている。

また、不安や問題回避などの問題行動のある一才程度の子どもは、母との肉体的接触を避け、母との関係に怒りを表現し、母と分離すると平静になる。それらの母は子どもとの関係を喜ぶ表現が下手で怒りが多出し、子どもを背の方から突き出すように抱いているという報告がある。(コロラド州エバーグリン市アタッチメントセンター)

新生児を育てる母親は連続して三時間以上の睡眠時間を持てない一〜二ヶ月がある。それに通常の母たちは耐えてきている。それが母になるための訓練の重要な一つであり、その子がその母の子どもになっていく過程なのである。ヒトはまず親になり子どもになることから人になり始めていくのである。

この最も基底をなす部分を丁寧に大切に形成し経験することを保証しなければならないだ。

女性に乳児を抱っこして授乳するにちょうどよい部位に乳房があることは偶然ではない。生まれ出た新しい命に身体的な、心的なエネルギーを補給する機会であり器官であるのだ。母が赤ちゃんを抱っこして授乳し、関係の形成をゆっくりと喜んでしていくことは聖なる命令なのだと考える。

人が人を愛するということは、相手のために労苦し痛むことを喜んでする積極的な行為である。その行為を初めて経験し学習するのが新生児と母との関係なのである。その関係を経験してこそヒトは人となるのだ。

人となるということは他者の存在や痛みや喜びを共有することである。

もちろん、親子・母子関係だけがすべてではないだろう、器質的な問題や精神・心理的な治療の必要な子どもたちであることもあるだろう。

児童相談所との会合で、親や母がいても、子どもにとって利益にならないばかりか、虐待などの害をもたらす者もいて、これが最近ずいぶん増えているという報告を聞き、また日常的に思い知らされてもいる。

国や企業が、社会的に賢い母となるための知識や技術を若い女性に提供し、新生時期からの母子関係を少なくても二年間は保証する仕組みを制度化することを切実に提案したい。

ヒトが人になるには何と多くの手立てと労力、技術や知識などが要求されることだろう。しかし、人が次の世代と夢や希望を共有しながら新陳代謝していくことがその使命であり、言い換えれば何を失ってでもしようとする全てではないかと思うのである。そのことが人間の歴史を展開してきたのではないだろうか。

バザーへのご協力ありがとうございました。
お陰様で今年は、純利益493,651円を
上げることができました。
すべて、光の子どもの家に寄付させていただきました。
光の子どもの家後援会，しずくの会，
光の子どもの家バザー実行委員会

日誌抄 ＝暮らしの風景＝ 1997年 4月1日 ▶ 5月31日

1日　新学期　幼稚園年中組へ２名　中学校へ４名　高校へ３名がそれぞれ入園・学　夕食をみんなでとり東大宮教会学校の教師なども来訪し入進学祝いを祈りと希望に満ちて盛大にそして楽しく
入園前３名　幼稚園３名　小学７名　中学１０名　高校７名　職員１５名で今年度を希望のスタート
2日　新高校生３名が開設当初からご支援下さっている奥秩父の民宿「滝川」に一泊し　新たな３年間への思いや決意を確認
4日　高山嬉の父母の墓参りに鳥取県米子市へ　従兄弟や叔母と生まれてはじめての出会いを父母の墓前で
8日　入学式　幼稚園　中学　高校へそれぞれが
10日　東京の田中博正氏より高校入学祝いを　毎年　感謝
11日　町内斉藤布団店より衣類をたくさん　ありがとう
16日　練馬区小林茂三郎氏より衣類をいただく　感謝
17日　赤十字奉仕団（江森憲次会長）　光の子どもの家後援会（金子嘉男会長）合同で構内の草取りご奉仕を２８名で　とてもきれいになりました　感謝
21日　開設以来親子二代にわたり続けられる町内江森ヘヤーサロンより子どもたちの散髪のご奉仕を今月も
24日　加須市のボランティアグループ『しずくの会』会長で 光の子どもの家設立準備会の結成以来ご支援下さっている梅沢三保氏より　氏が関わり続けている日中友好協会を通じた本場の春巻をたくさん
4日　児童福祉法制定記念行事第十二回目になる「子どもまつり」夕食会をみんなで楽しく
7日　川越市高階教会よりソファーをいただく　感謝
12日　今年も予定している定員外職員確保のためのバザーを行うために　子どもたちの小中学区内である町内からのバザー用品を集めないなど子どもたちの地域生活の不利益にならないよう配慮して下さっている光の子どもの家後援会　「しずくの会」　光の子どもの家バザー実行委員会合同準備会議
13日　加須市の梓沢梓氏より本をたくさん　感謝
17日　北川辺町増田博氏よりトマトをたくさん　感謝
20日　梅沢三保氏より梅干し用の梅をたくさん　感謝
24日　第５０回理事会開催　１９９６年度の事業報告・決算報告の審議と承認など
26日　坂本和歌子、野本百合子、山水まき、抱月寿子各氏など全国よりバザー用品をたくさん送っていただきました　感謝
27日　後援会総会　前年度事業報告並びに決算　今年度事業計画並びに予算案などを承認
30日　国際婦人福祉協会よりのご援助金受領会
31日　横浜市旭児童ホームのベテランの職員６名が来訪し見学と歓談と迫力に圧倒された１泊２日　（くら）

反射光

☆秋とは言ってもどう猛な暑さが続きます☆この町の子どもの問題に関わってきましたが、七月一日付でトワイライトステイ、ショートステイの契約を町と交わし、本格化しました☆また七月一日付で高二の岡眼鷹貴が退学第一号になり、仕事も生活も自立ははるかに見えません☆町内にご理解を得て貸家で生活を始めましたが早速同類の者がたむろし始め家主さんも驚き管理強化を要請されました☆要請以前から指導員の村上が懸命に関わっていますが、半端な数やエネルギーではありません☆この町の子どもの問題のある姿が見えてきます☆追い散らすだけでは問題の解決にはなりません☆これについても秋には町と話をしようと考えています☆実習生には心を暗くすることが少なくなく今後の福祉現場が思いやられます☆今夏、共栄短大の根本さん、十文字短大の五木田さんには鮮やかな希望を与えられました☆子どもの問題は寒く深く広大です☆若い仲間と共に怯まずに進みます☆乞うご支援！　（哲）